

マクス・ベアー

『フィジオクラシー研究』

Max Beer, An Inquiry into Physiocracy. London
1939. pp. 196.

山田雄三

社會主義史家として内外に汎くその名を知られてゐるマクス

ベアーは、いま七十餘歳の老齡の身を英國にあつて學史研究に没頭してをり、一昨年はマーカンテイリズムに關して『初期英國經濟學』（一九三八年）なる書を公刊したが、これに續いて出たのがいまここに紹介しようとする『フィジオクラシー研究』（一九三九年）である。英語で書かれたフィジオクラシーの研究書としてはいまままでヒッグスの『フィジオクラッツ』（一八九七年）が殆んど唯一のものであつたやうである。ベアーによれば、ヒッグスの此の書は材料の上でアダム・スミスの『國富論』中の論述以上に出てゐない。佛語によるものでは、ケネー及び彼の學派について、また當時の歴史的運動について、さすがに數多くの文獻が出てゐるけれども、しかしそれらもベアーによればスミスの論述以上の内容をもつものではない。ベアーは曰ふ、「かくてフィジオクラシーについての吾々の知識は、その學説の支持者達が農業を唯一の富の源泉とし工業を非生産的な職業と考へたといふことや、更にケネーの構成した經濟表がその不明瞭の爲めに多くの鋭敏な識者達の議論を紛叫させたといふこと等の見解に限られてゐる。従つてフィジオクラッツが、即ち偉大なる知識と廣い生活經驗と明晰な思想とをもてる此の派の人々が如何にしてまた何故にかかる見解を堅持し且つ彼等の反對者によつて擧示されたるすべての議論や明白な事實

に向つて彼等を擁護し得たかについては、吾々はなほ未だ暗黒のうちにある」(六頁)。即ちフィジオクラシーの源泉及びその意義が何であるかは從來必ずしも正鵠を得てをらず、したがつて從來の諸見解を超えてそれを確めねばならないといふのが、此の老大家の目ざす意圖なのである。

然らばペアーの解するフィジオクラシーの意義は何であり、その源泉は何であるのか。一言にしていへば、ペアーはフィジオクラシーに於ける經濟理論的な方面、即ち循環とか生産的・非生産的の區別とかといふ問題を輕視し、その社會倫理的な運動としての意義を強調するのである。さうして此の社會倫理的な運動はその源泉を中世の神學的思想のうちにもつてゐると解する。尤もケネーの自然秩序が自然法に結びつくことは誰しも指摘するところであらう。しかしその自然法の内容が中世の神學に他ならないといふのがペアーの力説する點である。ペアーが本書の最後の脚註で述べてゐるところによれば、從來のフィジオクラシー研究のうち單にロメニー (Tourenie, Le Mirabeau) とブリーフス (G. Briefs, Untersuchungen zur Klassischen Nationalökonomik) の二人のみが明白に此の點に言及してゐるに過ぎないといふ。私の狭い知識はいまそれを判斷する資格がない。ケネーの論調が神學者マルブランシュに著しく似

通つてゐるといふことは既にハレーヴィ (Halévy, The Growth of Philosophic Radicalism) の論じてゐるところであり、此の點からトマス・アクティナスとの聯絡も考へられるのではないかと思はれるのであるが、その詮索は他日に譲りたいと思ふ。恐らくケネー一派の思想と中世スコラ哲學との符合を鋭く指摘してゐる點はペアーの本書に於ける特色であると認めていふ。僅か二百頁に足らざる小形の本書が吾々讀者を強く惹きつける所以は、老練なる著者がここに焦點を向けて極めて明確に問題を投げかけてゐるからに他ならない。本書は實にアダム・スミスのフィジオクラシー論と並んで必ず讀まらるべき新研究である。ただ私は本書の著者がフィジオクラシーの經濟理論的方面よりも社會倫理的方面を重視する意圖そのものについて多少の疑問をもつてゐるものであり、ここで少しく此の疑問を提出したいと思ふ。

二

さてペアーによれば、フィジオクラシーは經濟上ではマリーカントイリズムへの反動であり、後者によつて齎された工業中心の産業革命や貨殖的な外國貿易や國民主義の否認である。しかしフィジオクラシーの他の、さうしてもつと根本的な方面は

ペアーによれば、倫理的なものである。ペアーは此の倫理的なものの根源を一般に自然法的な思想背景に求める。曰く「フィジオクラッツは普遍主義的外觀をストア派と基督教とから得た。農業的交換・價格・商業に對する見解をアリストテレスとトマス・アクィナスとから得た。また財産に對するロックの理由付けと、生活・自由・財産を擁護する文明社會の勃興とを承認した」と(七二頁)。しかしわけてもペアーの繰返し力説するのはフィジオクラシーに於ける中世的思想である。「ケネーの心意は現在を離れ中世的な過去に向つた。彼の自然秩序の要素の多くは中世の社會理論のうちに認められたものである。フィジオクラシーは實に中世的經濟生活の合理化である。經濟表はその生活の圖表化であつて、十八世紀のフランスの状態では決してない。ケネーの著作の批判的な面のみが當時のフランスに適用される。その積極的・建設的な面は一般に中世的狀態の上に型どられてゐる」(一一〇頁)。このやうな解釋は本書の到處に繰返し述べられてゐるところである。

以上の如き解釋から見て、アリストテレスの『政治學』從つてトマス・アクィナスの『スンマ』(第二編第二部第七十七問)に於ける「交換」の二種の區別について、フィジオクラットの諸文献との符合を指摘してゐる本書の箇處(五五頁以下)は特

に讀者の興味を唆るところであらう。周知の如くアリストテレスは交換に二種を區別した。一つは家計や國家がその家族及び市民の必要充足に對し財を獲得する場合である。此の場合に家計や國家は物々交換によるか又は貨幣の媒介によつて財を得るのであるが、それは流通の正義 *commutative justice* の基礎の上に、價値に對して價値を、從つて平等の交換を實現するものであり、かかる交換は自然的なものとされる。之に對し他の種類の交換がある。その目的は自然的必要又は一般的需要の満足にあるのではなく、貨幣的利益を得ることにある。此の場合には賣手と買手とは財を生産することなく、ただ彼等はより以上の貨幣額で賣らん爲めに財を買ふものである。だからかかる交換は貨幣 *chrematistic* に他ならず、その目的は際限なく貨幣的富を得ることにある。以上の二種の交換はまた、一方を對物的な「流通」 *commutatio rei ad rem* (又は *commutatio mercium* = *commerce*)、他方を貨幣的な「商賣」 *negotiatio mercium* (= *commerce*) と言つてもよい。ところでペアーはかかる交換の區別がケネーやル・トロシーやル・メルシエの多くの句中に採用されてゐることを指摘してゐる。尤もペアー自身の明言するところによれば(一一〇二頁)、フィジオクラットの學者達のうちル・メルシエのみが聖トマスからの

直接の引用を一箇處だけ試みてゐるに過ぎないのであり、他はすべて構想上の符合として指摘されてゐる。

フィジオクラシーの體系と中世的思想との聯絡は恐らくペアーの指摘する如くであらう。ケネーの「自然秩序」従つてその圖式化たる「經濟表」が自然法哲學に結びつくといふことは一般に認められてゐるところであるが、その自然法の内容は多分に中世的神學に通づるものがあるであらう。ただ通説ではケネー一派の自然法的な——ペアーによればむしろ中世神學的な——「自然秩序」のうちに同時に經濟生活の循環乃至均衡の把握の努力を認めてゐるのであり（例へばマルクスの『餘剩價值學說史』及びシュムペーターの『學說史』を考へよ）、これによつて彼に近代經濟學の萌芽たるの地位を與へてゐる。ペアーもケネー一派を以て近代經濟學の先驅者たることを認めないのではない。しかし彼の見解は通説とは異つて、ケネー一派の思想に於ける倫理の面を強調してその源泉を遡つて中世的神學のうちにあると共に、逆にケネーによるレストレーションが其の後の經濟學のうちに流れてゐると考へ、此の意味に於てフィジオクラットを以て近代經濟學の先驅者とするのである。ペアーは本書の最後の結論の部分に、「プラトニー及びアリストートルからアダム・スミス、リカアド、ジェ・エス・ミル及び彼等の

其の後の追隨者に至るまで、すべての經濟學的著述は直接又は間接に社會倫理との關係をもつてゐた」（一八七頁）と述べ、ついで次の如く論ずる。曰く「アダム・スミス、リカアド及び彼等の追隨者はマーカンティリズムに背を向け、世界の國々の間の自由な・交互的な・相方利益的な通商の爲めに彼等の理論的及び實踐的努力によつて普遍的な經濟連帶を復活し、交換の平等又は國際的な經濟正義を復活した。ケネー及び彼の追隨者の偉大さは、彼等が人類連帶の基礎を再建したことであり、その上に英國經濟學者達は建築をした。此の意味に於てフィジオクラットは經濟學の先驅者たる名稱を受くるに値する。純粹經濟科學に於ては、即ち財生産の理論や價值・貨幣本質・利潤源泉の諸問題や銀行・金融の事項に於ては、彼等の貢獻は當然に微少であり又は皆無である。……フィジオクラットの榮譽は彼等の社會倫理の上に、人類連帶の復活の上に、經濟的國民主義の否認の上に、平等交換と自然自由の理説の上に、道德の原理と經濟的自由との結合の上に横はる。彼等に經濟思想史上の永久の地位を確保するものはそれらの貢獻である」と（一八八—九頁）。

ここまで辿つて来て吾々は本書に於けるペアーの企圖が一層明白に示され得るやうに思はれる。彼はフィジオクラシーの經

濟的方面よりも倫理的方面を強調する。その倫理的方面は自然法哲學に、とりわけトマス・アクィナスに結びつくことが指摘される。さうして流通の正義はマーカンティリズムの貨殖的政策と國民主義とを否認すべき自由主義的社會倫理としてフィジオクラシーの體系のうちに構成され、其の後の英國經濟學の脈動のうちに流れいくものと解される。これがベアーの見解である。そこで吾々は一體かかる本書の企圖が如何なる意義を吾々に與へるのかを反省して見なければならぬのである。

三

フィジオクラシーの體系についてその自然法的思想の背景を擷むことは極めて大切である。シュムペーターが彼の『學說史』の一脚註に於て、多くの學說史家が自然法的思想をやかましく論じて經濟理論の内容を輕視することの不當を非難してゐる點を吾々はそのまま承認し得ない。學說史研究としては單に諸學說のうちから經濟理論の内容を汲みとるばかりでなく、常にその思想的背景をも突きとめねばならないと思ふ。十八世紀の後半に於ける經濟學の誕生はたしかに自然法を母胎としてゐる。母を離れて子を理解するだけでは足りない。さうかといつて母を理解すれば自ら子が理解されるといふこともできない。經濟

學は單純のその時々時代の思潮の所産ではない。吾々は母と子との、換言すれば自然法と經濟學との接觸と葛藤とのうちに、十八世紀以後の經濟學發展の問題を見なければならぬと思ふ。此の意味に於てベアーがフィジオクラシーに於ける自然法の背景をとりあげ、その内容について中世的神學との符合を指摘した研究はたしかに貴重なる業績たるを失はないであらう。

ただベアーはフィジオクラシーの倫理面を鋭く強調して、經濟理論上の貢獻が殆んど皆無であると論ずる。これは明かに行過ぎた見解であらう (Economic Journal, June-Sept. 1940) に於ける G. F. Shove の書評を見よ)。フィジオクラシーの體系は多分に中世的憧憬に色どられてゐるとはいへ、そこにはやはり經濟問題の理論的解決の企圖のあつたことを承認しなければならぬまい。さうして吾々の問題は此の經濟理論的な方向と自然法的な方向との關聯のうちに見出されなければならぬまい。

かくてベアーがフィジオクラシーに於ける中世的思想を指摘し、更にこれを自由主義と聯絡づけて問題を打切つてゐることは、吾々には尙ほ問題を殘してゐると感じられるのである。自然法思想は規範の根據を存在のうちに汲みとらうとする。ここではしばしば全く相反するものが等しく自然的なものとして根據つけられる。ベアーは中世的自然法を前述の如く自由主義

と結びつけるが、同じ自然法は最近のトミズムの主張の如く國民主義や統制主義とも結びつけられる。(ペアーの主張の裏にはナチス獨逸への嫌悪が藏されてゐるのではあるまいか。)これは兩者のいづれが正しいかといふよりは、むしろいづれにも結びつけられるのが自然法の思想なのである。自然法で自然的なものといふのはその人の懐く規範的信念を存在的なものとして表出することに他ならないからである。其の後の經濟學は規範の問題を自然法ならざる他の道行でとらへようと努めて來た。同時に經濟學は規範の問題を離れて存在の問題を正しく確立しようと努めて來た。ケネーの「自然秩序」は其の後の經濟學の循環乃至均衡に至るものであるが、此の構想は最早や自然法に支へられるのではなしに、むしろ假設と現實的條件とを確立していく人の操作に支へられるものである。ペアーの此の書はフィジオクラシーの經濟理論的業績を低く評價することによつて、かかる自然法と經濟學との葛藤の問題を看過してゐると思はれる。